

保育内容「表現」の授業研究

——子どもが感じる楽しさの視点から——

石井 昭一

(松山東雲短期大学)

1. 研究目的

保育者養成校の授業において、子どもにお話をするを想定して、学生が自分でお話を作ることについて研究したものである。お話づくりを考えていく中で、どうすればその子どもがお話を楽しんでくれたり、面白いと思ってくれるのかということを考えることになり、子どもがお話を楽しむことについて考える機会になるのではないかと思うからである。

2. 方法

どのようなことを考えるとお話をつくときに役に立つのか、研究する。

3. 結果

(1) お話をする相手となる子どものことを考えたり、お話の場面を決めるためのヒント

お話をする相手となる子どもを決めたり、お話の場面を決めるためのヒントはいろいろな保育の場面を考えることから得ることが出来る。ここではそれらのいくつかを挙げて整理してみたい。

①着想を得られやすいのは、よく遊んだ子どものことである。最初は遠くから見ている子も、だんだんと近寄ってくれるようになる。最初から懐いてくれる子もいる。これらの触れあいのことを思い出

して、決めることができる。

②一緒に遊ぶという点では①と一緒にであるが、特に折り紙を折るのが大好きという子どもは多い。一緒に折り紙を折った経験をもつ子どものことは、具体的に思い出しやすいと言える。

③一緒に砂場でお山やお団子を作ったり、池を作ったりままごとをして遊んだ子どものことは鮮明に覚えているものである。

④子ども達は動物が大好きである。身近な生活の中で接する動物としては、うさぎ、にわとり、カメなど、また、動物園に行ってみたり、絵本で接する動物としてはキリン、ワニ、ゾウ、ラクダ、クマ、ライオンなどがいる。これらのことを保育者に話したり、遊びの中で見立ててゆく子どもは多いと思う。関わりを持ちやすい保育の場面だと言える。

⑤“かくれんぼ”はこどもの遊びとしてよく行われているので、イメージしやすい。「まあだだよ」「もういいかい」というような言葉がポイントである。このような遊びの中から子どもの姿を発想することができる。

⑥給食を一緒に食べる時のことも印象に残り、子どもと関わることの多い時間である。

⑦「おつかい」とか「るすばん」は、一人ひとりがいつかは経験するものである。途中、難関もあり、小さな冒険があるけれども、ちゃんと一人でこなせることは、子どもにとって、大きな自信を持つことになる。このようなテーマは子どもにと

って関心が深いのではないだろうか。

(2)お話を作る時の工夫

お話をつくる場合、構成を考えたり、使うことばのことを考えるなど、いろいろな工夫が必要である。以下に、それらの幾つかを整理してみよう。

①冒険に出て外の世界に触れ、再び自分の根拠地に戻ってくるものを考える。暖かい家族の輪から離れ、恐るおそる冒険に出てみる。しかし、怖くなって、やはりお家に戻ってくる、そのような子どもの気持ちを描くもの。

②夢の世界、行ったことのない世界に行く楽しみを味わう話を考える。日頃憧れているものの世界に入り、夢にひたる。子どもは積み木遊びをしたり、牛乳パックで街遊びをしたりするとき、大人の眼からみて簡単な物をもって、さまざまなシンボルに見立てる。身近なものに様々な夢を抱けることは、子どもの特権である。それらの夢を、お話の中では、たやすく実現できる。

③大きさとか約束事に拘らない構成。子どもの眼には、眼前に見えるものから、様々な世界が広がる。自分が作った折り鶴が大きくなって、その折り鶴に自分が乗って空を飛ぶような発想がそれらの例である。また、うさぎさん、くまさん、などは、お話の中では、みんなお友達である。このことが、子どもらしい世界を感じさせる大きな原因になっている。動物は普通しゃべらないとされている。しかし、お話の世界では動物は人間の言葉をしゃべることができる。これはお話の世界の有力な武器であろう。

④繰り返しの世界。子ども達は繰り返しが好きである。次は何が出てくるのだろう、あれかな、これかな、という構造が好きである。

⑤子どもの日常世界に注目するもの。子どもにとって、お使いをしたり、留守番をしたりすることは、大きな冒険である。そのような日常のふとしたことに注目することは、子どもの世界を理解する糸口になる可能性を秘めている。

⑥お話をつくる場合、会話を多く登場させると、子どもにとっては聞き易くなる。『「上手にできたね」「いってきまーす」「いってらっしゃい」』などの日常会話の多用は、お話に膨らみを持たせる。

⑦ことばの工夫

「グングンひまわりが成長しています。」などの例におけるカタカナの擬音語を取り入れることは、聞いている子どもにとって楽しいものである。このような擬音語を子どもはよく使うのではないだろうか。

(3)誰を登場させるか。

登場人物をどのように設定するか考えてみよう。お話をする子どもにそのまま登場してもらうこともその本人にとってはうれしいことであり、一つの方法である。「お話の中の私は、次、どんなことをするのだろう？」とワクワクしながら聴くことができる。また、動物を登場させることも有効であると思う。

4. 考察及び結論

実際にお話を作ってみると、聞いてみて少し長いと感じられることが多い。自分で読んでみて、これらを少し整理すると聞き易くなる。更に、どの年齢の子にはどの程度の時間のお話が、また、どのようなお話が楽しめるかという点については、今後の研究課題である。